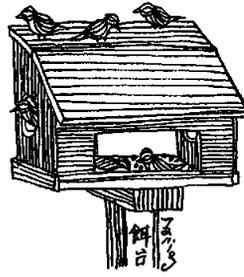


失われてゆく生活の中の自然

坂 本 直 行



世をあげて公害騒ぎの現在では、本当に

安心して食べられるものが、いったいあるのだろうか。何かひとつの物をとりあげてその生産過程をたぐってゆくと、何か人体有害の不安と結びつく物ばかりである。この心配を別としても、ごまかしや、過包装の物が多くて、食べた後は紙タツの始末に腹が立つ物だけである。こんなことで天寿を全うできるだろうかという不安は、私のように老人手帳をもらった人間は別としても、一応そういう不安を感じるのではないか。

私がいまここでいいたいことは、毎日のように新聞紙上で問題になっている自然破壊や一般公害の問題ではなく、現在は表面

に出ていないが、遠からず大きな問題として出てくるもののひとつと思うことについてである。それと、そのほか身近な生活の中の無駄などについてである。

まず野菜であるが、農業についての問題は周知のことであるから、ふれないことにする。何によらず、見かけだけ良くなって品質や味の低下は一般的現象だが、これは品物ばかりでなく、人間にも及ぶのがいまの文明だと口の悪い人はいうが、当らずといえども遠からずかもしれない。周知のごとく、農村から牛や馬が姿を消した。ここでいう牛は零細農家が飼う牛のことで、これは手不足やソロバンに合わぬためであるが、このことは野菜や果樹の畑に堆肥の添加が、全くゼロになったことを意味する。そればかりでなく、これは日本全国の農地にも次第にそれが広がりつつある。

昔は畑に堆肥は常識で、堆肥の生産を怠る百姓は駄農と評された。北海道の畑作農家は無論のこと、規模が大きくなった酪農ですら次第に堆肥が軽視されつつあるし、

多頭飼育と草地の拡大は当然のことながら生産される堆肥の量がひどく不足するため牧草生産ですら金肥のみに頼る農法をとらざるを得なくなった。農業の近代化、資本主義化がもたらした不可抗力的な欠陥とはいえ、将来に大きな禍根を残すことは明らかである。特に農地が狭く人口の過密な日本の農地の地力の奪略は、おそらく急速に発展するであろう。というのは多収穫をやらざるを得ないためである。

常にこれを補う必要があるわけで、これを補う方法には、堆肥と緑肥があるだけである。最近では、道内の酪農も草地開発で大型化してはきたが、地力維持のための緑肥

休閑地すら目にふれないのは、堆肥軽視というよりも無視、金肥専用の農法と化した、と私の目には映るのだが、将来どのようなことになるかを考えると大きな不安を感ずる。

土壌の中に腐植質が欠亡してくると、作物にとって有用なバクテリアが消滅して、無用有害なバクテリアがこれに置換られてゆく。昆虫も同様である。いまの畑には、もうミミズなんか住めないだろう。

というわけで、畑は腐植質の欠亡、プラスチック肥(化学肥料)プラス農業で、死の畑と化しつつあるわけだが、このような畑から生産される野菜、穀類、畜産物に、品質

や味の変化がないわけがない。あるとすれば、良いことはおそらくないだろう。品種改良や耕作技術が進歩してはゆくが、自然の法則はどうにもならぬだろう。

野菜も見かけは立派できれいだが、品質や味の低下した物が、少し出はじめてきたようである。一番それを感じるのは日本ネギである。ひどいのは硬くてどうにもならぬ物がある。もう昔のような、やわらかい日本ネギは、自分で作らぬ以外には食べぬだろう。その他キャベッジ、レタスが硬くなってきた。最近のキャベッジは、生食する気にはなれぬ。だがこの変化は、食味だけの問題ですむことではないだろうと思う。必ず何か栄養的な変化、それも悪い方向の変化があるのではないだろうか。

金肥によって生産された牧草を与えられ、生産される牛乳、肉などにも同様のことが考えられるし、牛の人工授精の受胎率の低下にも、一応このことの影響があり得るだろうし、また必ず出てくる問題として考えられる。

農業における土壌の悪化は、広範な影響を持つがゆえに、私は恐ろしいことだと思ふ。合成塩と海水から採った塩の、人体に及ぼす影響が云々されるのだから、金肥と農業で攻めて生産された野菜にも、同じことが考えられるのは常識だろう。

何によらず、少しでも自然に反して作られた物に、その物本来の味、香気がひどく低下するのは、いつも経験済することである。これは何かが不足しているためである。夏のミツバと冬のミツバ、促成のウドの香気のないこと、特にウドは何を食べているのかわからぬほど、香気は失せている。その他、シイタケ、ナメコ、トマト、イチゴ皆同様である。

私は天然の場合にでもこのことを感ずる。同じ道内の野生のウド、ミツバ、アイヌネギ（ギョウジャニンニク）がそれである。道南のウドは道東産のそれより、いわゆるアタが弱く、香気も劣る。私は札幌のウドは、生で食べても食べられてうまいが、道東のウドはアタや香気が強烈で、とても生食できない。ミツバ、アイヌネギの香気も同じである。もう十七、八年前のことになったが、東北の飯豊山に登りに行った折、雪溪の側に芽ぶいていたアイヌネギやウドを採り、すぐ味噌をつけて食べてみたが、北海道の物にくらべて、ひどくアタも香気も薄いのには驚いた。

このように自然の状態でもかくのごとしだから、ビニールハウスや畑の場合ならなおさらのこと、造化の神の有難さが、しみじみするわけである。農業の近代化は、不可避的だし結構なことながら、このきわ

めて重大な土壌の荒廃が無視されてゆくのは、どう考えても拔差しならぬ事態が起きることが予想されてならない。米国やカナダのように、膨大な耕地を所有する国とでは、同じ農法をとれないのは当然のことである。狭い日本では、農地を休閑させる余裕などあるわけがない。

次は日常販売される野菜の消費についてである。いまの奥さんたちは、少しでも手間がかかり、めんどろなことはやりたがらない。芋も人参も大根もネギも、少しでも泥がついていると買ったがらないから、わざわざ手間をかけて価格を高くし、そして乾いて鮮度の落ちた物がよるこばれる。一家族で一カ月十キロぐらいの消費量しかない米の味と価格については異状と思われぬくらいやかましいが、野菜となるとこの有様である。特にゴボウなど漂白剤で白くし、水にさらされた高いカスのような物が売れてゆく。乾いた野菜は自然に皮を厚く剥くことになるから、その無駄は大変である。

私は寝ていてめしが炊ける釜を使っている人に、米の味をやかくいう資格はないと思ふし、道産米がまずいから食わぬということでは、日本の食糧事情は、どの角度から考えても、おさまりがつかぬ事態がくると思う。米や魚の鮮度にはやかましいが、鮮度の落ちた高い野菜、決してうまいとは

いえないインスタント食品が重宝がられるこの矛盾を、いったいどう考えたらよいだろうか。便利さや少しの時間を嫌って、貴重な物を捨て去る浪費を、何故に考えないだろうか。

日本ネギなどは、あまり太いのは安価になる（規格によって）から、皮を何枚も剥いて上の規格にして売られるし、土の着いた皮や根は除去られ、見た目をきれいにして出荷される。皮を剥かれたネギはさらに乾き易いから、食べる時にはまた皮を剥いて捨てられる。これはほんの一例だが、この愚かしい無駄は、少し考えを改めれば防げる。いまの奥さんたちは、このようなことになるかと全く無頓着なばかりか、相変らず、「消費は美德」の生活態度に変化はない。だが、いまの消費は浪費を伴ったものであるから、それは亡国のというべきである。生活の中に少しでも自然的な要素を残し、無駄を省こうという考え方は、もうすっかりどこかえ落としてきたのが今日の有様である。

自然の色で満足できない（毒々しい色が好まれるというのか）奥さんたちには、わざわざコストをつり上げた着色物が歓迎される。みかんなどは、ビニール吹つけて、ツヤを出して出荷される。いかにも愚かに至極のことばかりである。

次に畜産物について少しふれておこう。母性愛に厚い奥さんたちは、自分の容色の衰えを嫌って母乳を子供に飲ませず、牛にその代用を務めさせる。本物と代用品の差がないとは絶対にいえないのが、自然の貴重さである。そのため悲惨な社会問題が起こる。またそういう誤った風潮に乗って、もうけるのも企業である。昔は母乳の出ない母親は離婚(少しひどいが)沙汰もあつたぐらいだから、母親は皆、真剣そのものであつた。だがいまの世の方が、母性愛についてやかましいのも皮肉なことである。

牛、豚、鶏の肉の提供者たちは、皆、抗生物質入りの飼料を与えられ、大根のように促成されて市場に出る。肉はやわらかいだけで、味にいたっては、ガタ落ちの一方で、特にひどいのはプロイラーであろう。これは無論、企業がもうけるためである。味なんか問題でないし、抗生物質が人体に無害の保証は全くない。それは過去の例でもよくわかる。運動も日光浴もさせられず、ただ卵を産む機械になった鶏が産む卵が、うまいはずもない。あの独特の好ましい香りなどあるわけもないし、目玉焼にすると黄味の中央が凹む、あわれな卵である。水分が多いためだろう。

しかし乳牛はこんなことじゃ飼えぬから

安心だが、牛乳の味はすでに駄目である。ざっと見ただけでも、すべてがこんな調子であつて寒心に耐えないが、これが文化というものの、宿命的な悲劇というべきだろうが、あまりにも薄っぺらじゃないだろうか。

先日テレビで、ナワでしばつて買つてゆく豆腐のを見たが、なつかしく思つた。いまの豆腐は水ばかり多いから、器に入れて置くと、水が出て小さくなる。味は無論良いわけがない。味噌汁に入れてもダシが出るわけもない。これは豆腐の固形分量に、規格がないためであろう。世をあげてゴマ化しと無駄ばかりで、こんなことではと思うのは、あながち年寄の冷水じゃないと思うのだが。

北海道は寒いから、冬の服装についていたいのには、女のミニスカートである。上にいくら厚着をしたところで、下がガラ空きではどうにもならぬ。信号待ち、バス待ちのあの寒そうな立姿の憐れさ、私には窓を明けてストーブを焚く人と同じに見えて仕方がない。中年以上になつて、神経痛やリュウマチが出易い保証はあるが、出ない保証は考えられない。カッコウと健康は、両方とも値段はないが、なくてもどちらが高いかは、自明のことだ。

流行の特徴は、無批判にある。流行にお

くれるツラさ、という風潮は、企業が見事に作りあげてしまつていから、後は作りさえすれば売れるのである。流行おくれは遠慮なく捨てられ、ゴミ捨に巨額の費用がかかるわけである。

私は雪のないときには、早朝マラソンに出るが、途中二、三カ所ゴミステーション(しゃれた名称に聞える)の傍を通る。が、そのとき驚いて足が止まることがある。まだ新しい衣服や、少しも痛んでないフットンが捨てられているからである。その他めし、パンなどはますますひどい有様。いまの貧乏は、米が高くても買える貧乏だが、昔の貧乏は、水田百姓が米を食えなかつたり、牛飼いが牛乳を飲めなかつた貧乏であつて、私も何年か米を買えぬ貧乏をしてきたから、この有様には、無性に腹が立つ。これでは、米が高いと騒ぐ資格は全くないのではないか。

浪費は断じて文化でもないし、文化的生活でもないばかりか、その行詰りは決して遠くはない。私にいわせれば、浪費こそ労働の無視である。つまり物の生産に要した労働力を、ドブに捨てることにはかならないからだ。賃上げストは悪いとは思わぬが、この有様では、私には理解できぬことだ。こんなことで将来日本の食糧事情が思いやられるのだが、どうであろうか。

ところが、私たちはあのだらしないトイレットペーパー騒動で、何を見ただろうか。私は自然的な要素をまるきり失つてしまった、いわゆる文化生活なるものの無力さを見た。私たちが老人手帳をもらった人間タラスなら、そう驚くに当たらないことだ。便法はいくらでもあるし、事実やつてきたからだ。南方諸国の人たちは、トイレットペーパーを使わぬところがたくさんあるが、いま印度六億の人たちが、それを使いはじめたとすると、印度の森林は五、六年で皆無になる計算だそうだ。だから全世界がこの情態になつたとしたら、地球上の森林は何年間もちたえられるだろうか。

一昨年、カナデアンロッキーに行つたとき、カナダのホテルのマッチは、驚いたことには軸木が皆紙であつた。膨大な大森林をもつ国が、このように木を大切にしているのだ。少しの雨でも全国洪水だらけになるほど、山を坊主にした日本のぜいたくさは、これもお国柄なのだろうか。ネパールでは中共製のマッチが売られていたが、これにも感心した。軸木は木ではあつたが、日本のより細く、そして短いのだが、ぜいたくな日本の物との差は何もない。まあ、すべてがこんな調子だと思えば間違いないようだが、情ない氣持がした。

最近「歩くスキー」という言葉が目につ

く。が、私にはどうもガテンがゆかぬ。というの、もともとスキーは雪の上を歩くための道具でもあるわけだった。私はいまでもこんな便利な道具はないと思って、毎朝雪の上を歩いている。だがスキーをはいで、雪の上を歩けなくしてしまい、そのうえ怪俄人を無教に作り出すようにしてしまったのは、企業とそれに飛びついた使用する人間たちである。

先にも書いたように、流行は無批判が前提だからだ。私はいまのスキーは、もうスポーツではないと思っている。ウソだと思つたら、スキー場と呼ばれるところへ行つて見るがよい。ぜいたくな防寒服を着て、ふるえながらリフトを待つ人の行列。リフトに乗つたらなお寒い。滑り出したらそれどころじゃない。寒いから休憩所で暖をとって、暖かい物を食べて金をとられる仕掛で、いわば流作業式に金をとられるのである。汗ひとつ流さず、寒さばかりのスポーツなんて漫画にもならない。まさにレジャーであることは、ゴルフと交わりがないが、ゴルフの方は歩くからまだましである。またスキー場は、流行の服装を競う社交の場でもある。

かくて企業の作戦は完璧で、もうかるわけだ。登山も流行のひとつになってきた。日常の生活があまり自然から離れているか

ら、肉体、精神ともに弱くなつてしまい、少しのことですぐ遭難となる。道具が立派でそればかりに頼っているから、道具が壊れただけですぐ遭難につながる。

整備された平坦な道路ばかり歩いて育つと、足の骨の変形が起きるそうだが、コンクリートの上ばかりで銅われる豚ですらもういろいろの障害を起こしているそうだ。

文化生活も大いに結構だが、一皮剥けば、ぜい弱そのものである。このぐらゐ弱いものはないのである。トイレットペーパー騒動や、石油騒動を見ればわかるとおりである。ちょっと大雪があると、すべてが混乱である。

除雪機械もゴム長も、オーバーもなかった昔の北海道の冬を思つてみるがよい。生活の中の自然的なものを、すっかり捨て去つた今日の人間の生活力の無力さを、何かにつけて感じないわけにゆかぬ。カッコの良さや流行は、生活力のたしにならぬばかりか、マイナスばかりである。流行のカッコばかりを気にして、栄養もとらぬいまの若者たちは、血がうすくて、輪血もできぬ有様とはなんとお寒い話であろうか。特に若い女性の半分はこの有様の由。こんな女が子供を産み、そして牛に育てさせるのを考えると、それ恐ろしい気持がする。金を使って体力を弱め、また金を使って

体力を買おうとするのが、いまの文化である。企業は先見の明があるから、なんとかセンターというものを作って、施設をしてもうけるのだ。だから体力も買うことになる。現在では、ひとりでもできないように、人間が作られてしまっているから、企業にもうけられるのだ。朝一時間早く起きてトレーニングすれば、金をかけないで体力は自分のものになる。騒音公害が問題に

されているが、騒音がゼロになったら、孤独に耐えられないのが、いまの人間である。十五年ぐらゐ前、谷川岳に行つたら、ラジオをガーガー鳴らしながら、登つてゆく若者がたくさんいて閉口した。山の静寂がこわい人たちだろうと思つた。別にラジオを聞いてもいいからである。

車で走りながら、自然など見れるわけがないのだが、現在はそういう世の中である。私は自然を通しての価値観を、原点に戻す必要を痛感する。私は窓辺に小鳥のエサ台を置いてあるが、この頃では毎日キジが庭に来るようになって面白い。エサ台の方にはシジュウガラ、スズメ、ヒヨドリ、カケス、時にはアオゲラが窓に寄つてきて楽しい。エサは、白米、トウキビ、ヒマワリの種、リンゴ、魚の骨や頭、パンタズ、トリのガラなどである。見ているとそれぞれの鳥の好みが違うって面白いが、白米

はいちばん不味らしく人気がない。昔から白米は粕といわれているが、こうなると人間がいちばんマヌケであることがわかって面白い。

最近はずいいたくパティが盛んで、私も時折り出席の時をもつのだが、出された料理の半分は残る。昔はそれを包んで、持帰えるようにしてくれてよかつたが、いまではそれが全部捨て去られるのだ。全国のそれを思えばおそらく膨大な量になるだろう。私はいつもそれが気になって仕方がない。「もったいない」のである。つまり、極めて膨大な労働力が捨て去られるわけである。こんな浪費はいまのうちに止める考えにならない限り、大きな壁にブチ当たることになるだろう。お伽斬りになった生活改善運動を、今度こそ線香花火式じゃなく、永続的なものとする運動を、多くの主婦さんたちに、お願いしたいものである。そして身近な生活の中にある貴重な自然、あるいは少しでも自然的である要素は、失わないように考えたい。

いまのうちに、バカげた浪費の悪習慣を反省して、忘れさられた大地に、しっかりと足をつけた生活にもどる必要を痛感する。現在のままでは、せつかく伸びた平均寿命は、今度は逆に縮つてゆくのではないだろうか。

(画家)